



Title	日本語の「ても」に関する考察：意味と形式に着目して
Author(s)	稲吉, 真子
Citation	国語国文研究, 152, 69(32)-58(43)
Issue Date	2019-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89729
Type	article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_152_69(32)-58(43).pdf



[Instructions for use](#)

日本語の「ても」に関する考察

—— 意味と形式に着目して ——

稲 吉 真 子

1. はじめに

日本語の条件文を表す代表的な形式としては、「たら」、「れば」、「ば」、「なら」が挙げられることが多い。しかしながら、「ても」にも、以下のように条件を示すようなケースが見られる。

(1) そんなこと言われてても、困る。

前田 (1994 : 106)

(2) 一生懸命勉強しても、試験には合格しないだろう。

上記 (1) の「ても」は、条件文を表す形式の一つである「たら」に置き換えても使用可能である。したがって「条件文」と同様の機能を持つと考えられるが、「ても」の中には、(2) のように、条件文に置換できないものもある。(2) のような「ても」は一般的に「逆条件文」や「譲歩文」と呼ばれ、議論されてきた¹。しかし先述の通り、(1) のように、逆条件文や譲歩文と呼べないものもあり、どのような点が逆条件、または譲歩なのかという点は議論の余地がある。

また、「ても」は従属節に現れるが、「ても」が表している従属節の使用状況は一樣ではなく、従来言及されてきた仮定的性質を持たないものもある。このような課題に対して、本稿では、それがどのような条件下で使用されているのかについて考察することにより、「ても」が示す意味を整理する。

なお、先行研究では意味的な考察が多いが、本稿ではその他に、形式面に着目した考察も行う。

¹ 基本的に両者は同等の意味・用法を指す。したがって本稿では、先行研究に言及する際はその先行研究で用いられている用語を使用し、それ以外では、より広く使用されている「逆条件文」という用語を用いる。

2. 意味的考察

2.1 「ても」の位置づけに関する先行研究

「ても」を研究した先行研究には、小泉（1987）、前田（1991、1993、1994、2009）、有田（2006、2007）、藤井（2002）などがあるが、先述のように、一般的には「逆条件文」や「譲歩文」として議論される。このうち前田（1991）では、条件文を仮定的か事実的吗、順接か逆接かにより、以下の4つに区分しており、「ても」はこのうちの仮定的逆接の逆条件文に分類されている。

表1 論理文の分類

	順接	逆接
仮定的	条件文→ (3)	逆条件文→ (5)
事実的	原因・理由→ (4)	逆原因文→ (6)

（前田 1991：55 より引用、例文番号は筆者による）²

- (3) この薬を飲めば風邪が治ります³。 (条件文)
(4) この薬を飲んだので風邪が治りました。 (原因・理由文)
(5) この薬を飲んでも風邪は治りません。 (逆条件文)
(6) この薬を飲んだのに風邪が治らなかった。 (逆原因文)

しかしこの仮定的か事実的かという判断は、主節のテンスが関与しており、必ずしも「ても」の表示のみで判断できるものではない。これについては2.3節で詳しく考察する。

2.2 「ても」の分類に関する先行研究

前田（1993、2009）では、(5) のような逆条件文の「ても（でも）」を対象に、以下の沼田（1986）の分類^{4,5}をもとに「も」と関連づけた、別の視点からの考察がなされ

² 有田（2006：10）では、前田（1991）の「逆条件文」を「仮定譲歩文」、「逆原因・理由文」を「事実譲歩文」と呼ぶとしており、用語については研究者により差異がある。

³ この条件文の例では「ば」が挙げられているが、その他には「たら」、「なら」、「と」なども条件を表す接続助詞として挙げられる。このうち、「ても」と最も対応関係にあるのは、活用の形態的变化が同様にテンスの分化がないという点から、「たら」であると言える。

⁴ 沼田（1986）は「も」がとりたてるものを「主張」、それが暗示するものを「含み」とし、さらにそれを他者の存在という観点から分類している。

ている。

も₁ 単純他者肯定 主張 断定・自者肯定
かつ

含み 断定・他者肯定

(7) 足の動きに合わせて手も自然に動かしている。

も₂ 意外 主張 断定・自者肯定
かつ

含み 想定・自者否定、他者肯定

(8) 彼の放蕩ぶりには親も愛想を尽かした。

も₃ 不定他者肯定 主張 断定・自者肯定
かつ

含み 断定・他者肯定

※二次特徴：他者は不定

(9) 春もたけなわになってまいりました。

前田（1993、2009）では、この沼田（1986、2000）の分類と関連づけ、「ても」を以下の4つに分類している。

①て形の並列・とりたて→「も」を取り外すことも可能。

(10) 遺書もなく、隣の人は口論を聞いてもいない。

②並列条件→新たな条件・状況が起こった場合に、先行する条件文と帰結が変わらないことを示す。これは2つの条件文を並列的に並べて1つにした表現であり、2つ目の条件文では必ず「ても」を用いなければならない。

(11) 3を自乗すると9になるし-3を自乗しても9になる。

3を自乗すると9になる。	+	-3を自乗すると9になる。
↓		
3を自乗すると9になるし、-3を自乗しても9になる。		

③並列・逆条件→並列条件と逆条件にはその両方の含みを持つ場合がある。これは、

⁵ 前田（1993、2009）では沼田（1986）が引用されているが、本稿では、同類の考察がより簡潔にまとめられている沼田（2000：170-172）のものを引用し、まとめている。

並列条件において並べられる新たな条件・状況が一般的には主節の事態の成立を阻害する事象であると考えられる場合。

(12) (中略) 結婚すれば悔恨あり、結婚しなくとも悔恨ありということになるのではなかろうか。

④逆条件→通常はその帰結を引き起こさない条件・状況がその条件関係を成立させる場合。

(13) 水にぬれても壊れない。

通常の条件文 =

水にぬれたら

 壊れる。

↓ 〈否定〉

逆条件文 =

水にぬれても

 壊れない。

①は沼田(2000)の分類のも₁に当たり、④がも₂に当たり、③はその両方の性質を持つものであると説明されている。「も」と「ても」の関わりについては、本稿でも、3.2節および4節にて考察する。

2.3 仮定的／事實的、順接／逆接

まずは、前田(1991)の仮定的か事實的かという点について考察する。

(14) 【バスを待っているAに対して】ここで待っていてもバスは来ませんよ。

(15) ここで待っていてもバスは来なかった。

先の(5)の「この薬を飲んでも風邪は治りません」という例は、逆条件文とされている。前田(1991)の分類では、(14)も逆条件文として分類されるが、(5)と(14)には従属節の発話状況に違いがある。まず(14)の例では、Aはすでにバスを待っている状態にある。そこに、「場所を間違えている」や、「バスが運休している」などの何らかの原因や理由⁶があり、「バスが来ない」という事態が発生している。一方で(5)の「この薬を飲んでも風邪は治りません」という文の「薬を飲む」という行為は、まだ行われる前の行為とも、完了している行為ともとれる⁷。このように両者ともに逆条件を表す点は同様であるが、従属節の状況が仮定的か事實的かという点においては違いが見られる。この「ても」が表す言表事態は、条件との関わりから5つに分類することができる。

(16) 盆と正月が一緒に来ても嬉しくない。

⁶ この原因、理由に当たる部分は省略される場合が多い。

⁷ しかし未然の意味に傾きやすい。

- (17) 地球がひっくり返っても行かない。
 (18) 春になっても状況は改善されないだろう。
 (19) 今から一生懸命勉強しても試験には合格しないだろう。
 (20) ここで待っていてもバスは来ませんよ。 (= (14))
 (21) こんなに作っても食べきれないよ。

一つ目は (16) や (17) のように、絶対的に実現しない条件である。このようにあり得ないような条件を提示することにより主節の意味を強調する機能がある。次に必ず実現する未来が条件になっているものが (18) の例である。この「必ず実現する未来」というのは (19) と比較すると明らかになる。(19) の一生懸命勉強するかどうかはまだ実現していない未来の話ではあるが、勉強するかどうかはその相手次第であり、「春になる」のように必ず実現することが決まっているわけではない。次に (20) の例であるが、「ここで待っている」は現在の状況であり、進行中の動作ととれる。最後に (21) の例であるが、これはすでに完了している動作として捉えられる。まとめると、(16) から (18) の従属節は未だ訪れていない事態のことを示しているが⁸、その実現可能性にはそれぞれ違いがあると言える。

なお、前田 (1991) の分類を見ると、事実的であるとされる (4) や (6) の時制は過去形になっており、仮定的であるとされる (3) や (5) は現在形が使用されている。しかし「ても」が使用されていても、(15) のように、過去形を使用すると事実の叙述を表せることから、仮定的か事実的かという判断は形式により判断できるものではなく、主節のテンスが関与すると言える。

次に、順接か逆接という点についてであるが、逆条件文の「逆」とは、(3) のような「この薬を飲めば風邪が治る」という条件文の、話し手の期待を覆すことに由来する。このような、話し手との期待の関連から考察しているものに、田中 (1988) がある。

- (22) たとえ雨が降っていても試合はあるでしょう。

(22) のような譲歩文では、従属節の事態が生じて、いずれにせよ、「試合はある」ことが言及されている。その前段階には、「雨が降らなければ試合はある」といった世界知識による一般的な判断があり、その事実⁸に反した出来事が生じた時に、「雨が降れば試合はないかもしれない」といった予測が発生する。つまり、予測に反して当該の事態が成立することが「ても」によって表されるというのが田中 (1988) の主張である。

前田 (1993) でも、この予測性の観点からの議論がなされており、「ても」は先行文 (または裏にある常識的な条件関係を表す文) における条件・帰結が否定され、通常な

⁸ 先述した通り (19) のような例は未然とも進行中ともとれる。

ら成立しないだろうと予想される事態同士が条件的な関係を取り結んだものであるとされている。これは、話し手が持っているであろう世界知識が、いわゆる裏にある条件となっており、(22) のように裏にある条件が予測しやすいものから、以下の (23) のように、聞き手が予測を持っていないようなものまで、段階性がある。

(23) サンフランシスコに行ってもケーブルカーに乗らない方がいいですよ⁹。

(24) そんなこと言われても、困る。 (= (1))

(23) の例では、サンフランシスコのケーブルカーがどのようなものかを知らない、もしくはサンフランシスコにケーブルカーがあること自体を知らない場合、聞き手は「サンフランシスコに行ったらケーブルカーに乗った方がいい」というような予測を持ち合わせていないことになる。したがって条件に当たる部分がないため、逆条件とは言いにくくなる。(24) も同様で、(22) と比較し、予測に当たる条件は還元しにくい。このような場合、逆条件とは言いにくくなり、逆条件の成立にはその裏にある「条件」を持ち合わせているか否かが重要になると言える。

3. 形式的考察

3.1 「VでもVでも」に関する先行研究

以上で扱った例のように、「ても」は基本的に従属節に現れる。逆条件文の場合、「ても」が現れるのは従属節に一度である。しかし「ても」は他の条件形式とは異なり、以下のように反復させて使用することができる。

(25) 待っても待っても太郎は来なかった。

藤井 (2002: 272) では、このような「VでもVでも」の構造をとる「ても」を反復性譲歩条件構文と呼び、何度も反復される事態、またはいつまでも継続する事態が、常に同一の帰結に結びつくことにより生じる非条件性を表すと述べている¹⁰。

野呂 (2016) では、このような「VでもVでも」文について、「どんなに／いくら～しても」との意味の違いや、生起する動詞や後件の制約などについての考察が行われており、「VでもVでも」は当該事態が継続・反復している点に焦点が当てられているのに対し、動詞が1つである「どんなに／いくらVでも」は、事態をまとまりとし

⁹ サンフランシスコのケーブルカーは移動範囲が短いわりに運賃が高いため、日常的な交通手段には不向きであるとされる。したがって、現在では日常的な交通手段としてよりも、観光客向けの乗り物としての利用が多いようである。

¹⁰ Fujii (1994: 201) でも同様に、行動が複数回繰り返される、もしくは状態が無限に続くにも関わらず、結果は変わらないことが示されると述べている。

て捉えることが可能であるという違いに着目し、「V ても V ても」の意味的特性を以下のようにまとめた。

(26) 同一動詞の繰り返し、事態 V の継続・反復を表す

(27) 後件は、事態 V の継続・反復から予測される結果が生じたことがないことを表す

野呂 (2016 : 182)

そしてこれらの特徴を踏まえ、「V ても V ても」と後件との関係は、「事態 (V) が相当時間にわたって継続または何度も反復したにも関わらず、予測される結果が一度も生じない」ことであるとしている (野呂 2016 : 182)。

このように「V ても V ても」に関しては、類義表現との比較などから、意味的特徴については言及されているが、そもそもなぜ条件に関わる形式の中で「ても」のみが反復構造をとれるのかという形式的特徴に関する疑問は未解決であり、また意味的特徴に関しても、「V ても V ても」の類似表現である「V₁ ても V₂ ても」や「V ても \neg V ても」などとの比較が十分ではない。そこで本稿ではこの 2 点について、考察を行いたいと思う。

3.2 「てもても」文

まずは、条件に関わる形式の中で、なぜ「ても」のみが反復構造をとれるのかについて考察を行う。

前田 (1993) でも指摘されているように、「ても」は「て形」を「も」がとりたてているものとして捉えることも可能である。そこで、「ても」の構造を「も」との比較を通して考察する。

(28) 太郎も次郎も来た。

まず「も」の場合、(28) のように、「A も B も V」の構造における、A や B のような V に前接する要素は、複数付け足すことができる。「ても」も「も」と同様の構造的性質を持ち、「V₁ ても V₂ ても」の構造になっている場合、複数の要素を付け足すことができる。「V₁ ても V₂ ても」のように、異なる要素が連続する場合は、複数の条件があることを表すが、「V ても V ても」のように同語を反復する場合は、基本的に 2 回繰り返されるのが普通であり、3 回以上繰り返されることはあまりない。これは「V ても V ても」と「V₁ ても V₂ ても」のような、それに類似する表現が示す意味が異なることに起因する。以下ではそのような「てもても文」の種類と意味について具体的に考察する。

(29) 食べても食べても太らない。 \langle V ても V ても \rangle

(30) 食べても食べなくも太らない。 \langle V ても \neg V ても \rangle

- (31) *食べなくても食べなくても太らない。 $\langle \neg V \text{ ても } \neg V \text{ ても } \rangle$
 (32) 食べても飲んでも太らない。 $\langle V_1 \text{ ても } V_2 \text{ ても } \rangle$
 (33) 食べても運動しなくても太らない。 $\langle V_1 \text{ ても } \neg V_2 \text{ ても } \rangle$

(29) のように同語を繰り返す場合は、「食べる」という動作が複数回行われていることを意味し、そこから「どんなに食べても」後件「太らない」という結果になるという意味が生じている。(29) は、(30) のように前方の「ても」と後方の「ても」が否定関係にあっても成立する。この場合、「食べる」という行為は「太ること」と関係ないことが意味される。なお、(31) のように、両方が否定関係にある場合は非文になる¹¹。

次に「ても」がそれぞれ別の要素に後接している場合を見る。(32) では、「食べる」以外にも「太ること」に関与するであろう「飲む」という行為を示すことにより、「何をしても」後件「太らない」という結果になることを意味する。「 V_1 ても V_2 ても」文の場合、(33) のように、前方の「ても」と後方の「ても」が否定の関係にあっても成立する¹²。これは (32) と同様に、「太ること」に関与するであろう一例として、「運動しないこと」が挙げられていると説明できる。

この「てもても文」の関係性を「も」の機能である同一範疇判断¹³の観点から分析すると、前件の条件が複数発生しても後件の事態に変化はなく、前件と後件の関係性が変わらないことが示されていると考えられる。なお、条件を複数並べることで、「どのようなことをしても」といった強調の機能も発生する。

4. 会話の分析

以上を踏まえ、本節では、「ても」が会話の中でどのように使用されているかを分析する。

- (34) 【石坂と財前がどの製作所を採用するかについて口論になっているシーン】
 財前 「社益…。」
 石坂 「あん？」

¹¹ これは世界知識との整合性により意味的に成立しにくいためであるという見方もできるが、「寝なくても寝なくても目が冴えている」のように、意味的には問題ない場合も、やはり不自然な文となる。

¹² その場合、程度副詞を入れ、「たくさん食べてもまったく運動しなくても太らない」とするとより自然になる。

¹³ 加藤 (2006: 97) では「も」の機能を、「同じカテゴリーに属するという判断 (同一範疇判断)」とし、加藤 (2017: 16) では「も」の機能を、「X と同一範疇をなすと判断される Y を焦点として提示する」としている。

財前 「これを見^(a)てもまだそんなことが言えるのかな、あなたは。」

((サヤマ製作所データ偽装の週刊記事を出す))

藤間 「なんだそれは。見せろ。」

(『下町ロケット』第10話)

(35) 【椎名と佃が、椎名の父の遺作について話しているシーン】

椎名 「あの全く金にもならなかったガラクタか。」

佃 「その鋳工リスタービンが、次のロケットの、タービンポンプのキーパーツとして採用されることが決定したそうだ。あんたのお父さんの技術が、他にはまねできない、ロケット開発を支える最先端技術として認められたんだ。お父さんは、約束通り、トップを取ったんだ。例え会社は潰され、特許をすべて奪われたとし^(b)ても、その技術はこれから何十年先も生き続ける。それが技術だ。どんなにデータを偽装して勝ったとし^(c)ても、そんなまやかしの技術はすぐに消えてなくなる。技術は嘘をつかない。勝つべくして勝つなんてことはあり得ない。(以下略)」

(『下町ロケット』第10話、一部省略)

(34a) から (35c) は、形式上は同じ「ても」であるが、(34a) は従属節と主節との関係が逆条件であり、(35b) と (35c) は並列的な関係になっている。並列的な用法の場合、前方の「ても」から「も」を取り除いても、非文とはならない。これは「も」の構造的制約に共通する。

(36) 太郎が来た。次郎も来た。

(37) *太郎も来た。次郎が来た。

「も」は重複して使用する場合、前件の「も」は義務的ではなく、「が」のような他の助詞でも置き換え可能である一方で、後件の「も」の使用は義務的となり、(37) のように、例え前件に「も」が使用されていても、後件に「も」が用いられていなければ非文となる。先述のように、「ても」の並列用法も同様で、前件の「ても」の「も」が義務的ではない一方で、後件の「ても」は義務的である。このことから、並列関係にある「ても」は「て形」に「も」が付加された形であると言える。

次に、先に論じた事実的か仮定的かという観点から考察すると、(34a) の前件は、仮定的なものである一方で、(35b) や (35c) の前件は事実的なものとなっている。つまり (35b) や (35c) での「会社は潰され、特許をすべて奪われたこと」や、「データを偽装して勝ったこと」はすでに起きていることであり、後件はこれから起きるであろう未来に関することである。先行研究では、逆条件文の「ても」は仮定的で逆接的であるとされているが、これまでに論じてきたように「ても」は必ずしも仮定的・逆接的ではないと言える。

なお、(35b) と (35c) をスコープの観点から比較すると、(35c) は「どんなにデー

タを偽装して勝ったとしても」までが「ても」の作用域であるのに対して、(35b)は「例え会社は潰され、特許をすべて奪われたとしても」まで「ても」の作用域が及んでいることが分かる。つまり、先の「V₁ても V₂ても」の V₁に後接する「ても」が省略された形であると言える¹⁴。

5. 焦点の違いに生じる推意の形成

以上のように前節では、「ても」のスコープについて触れたが、その他に、「ても」の使用には焦点性も関与し、その違いにより形成される推意に違いが見られる。

(38) この薬を飲んでも風邪は治りません。 (= (5))

(38) の例で、予測に反する理由を復元し、構造化すると、「V ても X だから Y」となり、理由に当たる「X だから」が省略されていることが分かる。(38) の Y に当たる部分を具体的に復元すると、「なぜならこれは胃薬だからだ」や「なぜなら風邪を治すためには薬を飲むよりも十分な休息をとるべきだからだ」などの理由が考えられる。これらは大きく、「薬」自体に関与する理由と「風邪は治らない」という命題全体に関与するものに分けることができる。

つまり、「ても」は焦点になりうる要素が複数存在する場合、後接している要素と命題のいずれも焦点にとることが可能であり、その時々文脈により選択された一方の焦点の意味で解釈される。

(39) この問題は太郎に言っても無駄だよ。

(39) の例でも同様の分析ができ、「太郎」自体に問題解決能力がないために、Y における「無駄だ」という結論に至った場合と、「問題が複雑すぎて（有能である）太郎に言っても無駄だ」という結論に至った場合の2つの解釈が可能である。

したがって、「ても」が成立する条件は、(38) の「この薬を飲んだら風邪は治る」や、(39) の「この問題は太郎に言ったら大丈夫だ」という前提があり、その前提が成立しない場合に成立するのが「ても」であると言える。言い換えれば、「ても」には話し手の持つそのような前提を活性化させる機能があると言える。

¹⁴ (35b) (35c) は、「ても」としても分析可能であるが、引用を示す格助詞（引用格）の「と」とサ変動詞「する」がひとかたまりの「としても」になり、仮定条件を導入する際のマーカーとして文法化していると言うこともできる。

6. まとめ

以上のように本稿では「ても」の考察を試みた。まず、従来の、仮定的・逆接という意味を再検討し、仮定か事実かという判断は主節のテンスが関与するため、必ずしも仮定的であるとは言えないことを主張した。また、従属節の表す条件は、絶対的に実現しない条件、必ず実現する未来の条件、未確定の未来の条件、進行中の条件、完了している条件に分けることができると指摘した。

次に形式的な観点から考察を行い、「ても」が複数回使用される「てもても文」について分析した。「ても」が他の条件に関わる形式とは異なり、複数の要素を羅列できるのは、「も」の同一範疇の要素を複数並べることができるという性質が関与していることを指摘した。

最後に「ても」には、後接する要素を焦点とするものと、命題全体を焦点にする例があり、文脈によりどちらの意味にもとれることを指摘した。加えて、「ても」には話し手の持つ前提を活性化させる機能があることを述べた。

参考文献

- 有田節子 (2006) 「条件表現の導入」 益岡隆志 (編) 『条件表現の対照』 pp.3-28. くろしお出版.
- (2007) 『日本語条件文と時制節性』 くろしお出版.
- 加藤重広 (2006) 『日本語文法入門ハンドブック』 研究社.
- (2017) 「日本語副助詞の統語語用論的分析」 加藤重広・滝浦真人 (編) 『日本語語用論フォーラム 2』 pp.1-46. ひつじ書房.
- 小泉保 (1987) 「譲歩文について」 『言語研究』 91. pp.1-14.
- 田中寛 (1988) 「逆接の条件文〈ても〉をめぐって」 『日本語教育』 67. pp.139-158.
- 沼田善子 (1986) 「とりたて詞」 奥津敬一郎・沼田善子・杉本武 『いわゆる日本語助詞の研究』 pp.105-226. 凡人社.
- (2000) 「とりたて」 仁田義雄・益岡隆志 (編) 『時・否定と取り立て』 pp.154-212. 岩波書店.
- 野呂健一 (2016) 『現代日本語の反復構文—構文文法と類似性の観点から—』 くろしお出版.
- 藤井聖子 (2002) 「所謂「逆条件」のカテゴリー化をめぐって—日本語と英語の分析から—」 生越直樹 (編) 『対照言語学』 pp.249-280. 東京大学出版会.
- 前田直子 (1991) 「条件文分類の一考察」 『日本語学科年報』 13. pp.55-80. 東京外国語大学.
- (1993) 「逆接条件文「～ても」をめぐって」 益岡隆志 (編) 『日本語の条件表現』 pp.149-167. くろしお出版.
- (1994) 「条件表現各論—ても／タッテ／トコロデ／トコロガー—」 『日本語学』

13(8). pp104-113.

——— (2009) 『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究—』 くろしお出版.

Fujii, Seiko. (1994) "A Family of Constructions: Japanese TEMO and Other Concessive Conditionals." *BLS*. 20. pp.194-207.

用例出典

TBS テレビ『下町ロケット』八津弘幸他（脚本）、池井戸潤（原作）。（2015年10月18日から12月20日放送）

（いなよし まこ・北海道大学大学院博士課程）